

学校づくりの記Ⅱ

校長通信

発行日 1月18日

No.36

「なんでぼく(わたし)だけ?」考

まちがったことをしている子どもを見かけて注意すると、自分の非を認めるどころか、

なんでぼく(わたし)だけ? 他のかたがやっているやん。」

と言います。返す子がいます。そういう子が以前に比べて多くなってきたような気がしています。

なぜ、そういう思考回路になつてしまつたのだろうか? ヤマヤした気持ちを抱えていたのですが、たまたま読んだ本に一つの答えを見つけました。

最近の子どもと親の関係は、垂直的に厳しく、嫉ける「親子」というより、水平的に楽しみを共有する「友人」に近い。大人としての役割を担いきれていない人が親になっている。

そういう親の下で育てられた子どもは、教師に対して敬意を持ちません。たとえば叱られたり注意されたりしたとき、なぜそれがいけなかったのかを考えるのではなく、どうして私だけが叱られるのか、他の人もやっ

ているじゃないかと考えるようになる。問題の論点がずらされてしまう。

これは間違つた平等意識であると思います。社会の不公平をなくしようという公共的な意識ではなく、自分自身を守る盾としての「平等」なのです。ネガティブな評価を下されるなら、

全員に下してほしい。自分一人だけ貶められるのはイヤだ、というわけです。(なぜ日本人は学ばなくなつたのか 齋藤孝 講談社現代新書)

「だめなことはだめ」と叱られた経験がない子は、自分の非と向き合うだけの精神的な強さが無く、自分を守ることにしかできなくなつていくといふことでしょうか。

更に私が考えさせられたのは筆者の次の言葉でした。

「こういう子どもは、社会の厳しさに向き合う心のタフネスを持たないまま成長することになります。そうすると、たとえば職場で現実と直面したとき、自分を守るために、「この仕事は自

分に合っていない」などと言い訳して辞めていくようになる。」

つまり、そういう子どもをそのままにしておくことは、すべて原因を他に求め、すり替えて自立して社会を生き抜くこと

となど、到底できないひ弱な大人にしてしまつたということ

「なんでぼく(わたし)だけ」的思考の対極にある人間だと思つたのが、これもたまたま読んだ差別と日本人の中に出てくる野中広務です。

野中広務は、政治家を志したきつかけを次のように書いています。

私は徴兵される前から勤務していた大阪鉄道管理局で、戦後も仕事を続けていた。上司にも恵まれ、人並み以上に昇進したのだが、それが同僚の嫉妬を買うことになる。ある日、壁一枚隔てた部屋からこんなやりとりが私の耳に入ってきた。

「なんで野中だけ特待生みたいに昇級するんだ」

そう言ったのは私よりも年上だが役職は下の従業員である。それに対し、もう人の男が言葉を返した。

「野中さんは大阪におつたら飛ぶ鳥落とす勢いだけど、地元に戻ったら部落の人だ」

私は耳を疑った。その声の主は、私がわざわざ地元から鉄道管理局に就職させて、手取り足取り仕事を教え、私が行けなかつた夜間大学にも仕事を調整して行かせてやり、おまけに学校から帰ってきたら味噌汁も作つてやつた後輩だったのだ。

そんな人間に裏切られるとは……。

私は茫然自失の状態となり、四日間ほどのうち回った……。

のうちに回りながら導き出した結論は、「地元には部落だからということと差別される現実がある。ならば、自分の出自を知つてくれている地元を帰つて、差別をなくすために政治家になろう」ということだった。差別と日本人 野中広務 辛淑玉(著)、角川書店

「何で自分はこんな目に遭わねばならないのか」と、部落差別の不条理に崩れ落ちつつになりながらも、敢えてその現実と向き合つていった野中広務。自立して社会を生き抜くことは、いついかなる時でもかかると深い感慨をもつて読みました。

今年、本校の学校目標を改めました。自立して社会を生きぬく人

として、そこに込めた願いとして、

私たちが小学校の教師は、『この子が将来社会に出るとき』を見通して指導するという意識は弱い。社会で自立して生きられるために、今、この子に必要なことは何か? という指導の構えが重要だ。」と書きました。

ほんとうに自立した強い子を育てていくことになつてきたか否か、私たちのこの一年間の仕事はそういう視点からも見つめていかねばならないと思つていきます。